成る程戰爭は大きな破壞作業を伴ふことは、否み難い事實である。しかし他面この戰爭間人間の叡智が働いて、人類の社會生活上、精神的、物質的兩方面に亙り偉大な發展を激成してゐることも、史上否み難い事實である。殊に戰爭直後その影響を受けた平和に於て、人類は通常偉大な文化的躍進を遂げてゐる。しかしこの平和もやがて爛熟するに從ひ、色々の頽廢的作用が起り、文化の進運が却て抑制され、遂にその極に至つて次の戰爭が見舞つて來れるのである。これは世界歷史の殆んど公式といつても差支へない程であらう。

勿論この現實の姿に對し、各人各樣の批判はあり得る。しかしかゝる嚴肅な事實に對し、獨斷的な否定を投げかけて果してよいものだらうか。東洋の老子は、その開卷劈頭「道の道とす可きは常道に非ず。名の名とすべきは常名に非ず。無名は天地の始め、有名は萬物の母」と喝破してゐる。せめてこれ位の氣持も少しはあつてよからうではないか。

敎訓の後半は、既にその前半を納得すれば首け得る筈である。著者は既に第五編に於て、この點に關し各時代毎に詳しく述べたから今更繰りかへす必要もあるまい。思へば人類の社會生活は、戰爭と平和との二つによつて表現されてゐる。それが全部である。既に我々が、その全部の發展を認める以上、その個々の構成要素が更らに發展を遂げることは當然である。

歷史は當然のことを、嚴肅に吾人に示してゐるに過ぎないのであらう。

（二）戰爭及平和の發展は人間の精神的、物質的兩方面の、調和のとれた叡智によつてなされる。

これも當然と思はれる程妥當性のある法則的敎訓であらう。しかし歷史の跡を眺めるとき、此敎訓が充分に理解されなかつたが爲に、如何に多くの犧牲や、無駄な仕事がなされたかを見て、吾人は愕然たるものがある。

我々は世界戰爭史を顧るとき、古くはサルゴン大王、ハムラビ王、阿育大帝、漢帝國の戰爭、中世に於ては元寇之役、瑞西の獨立戰爭、アクバル大帝の戰爭、近代に入つては、獨逸のウィルヘルム一世の戰爭、殊に我國の日淸、日露戰爭等に於て、如何にこの精神的、物質的兩方面の叡智が程よく調和され、その結果國家の、延ては世界の發展に如何に大きく寄與したかを痛感せざるを得ぬではないか。

他面それとは反對に、史上如何に多くの戰爭が、かゝる調和のとれた叡智に缺け、その結果國家の、延ては世界の進展を阻害し、一時的にもせよこれを逆行せしめたかを、吾人は史上備さに

檢討したのである。此種の戰爭を列擧すれば、その數の少きを憂ふることはないが、賢明なる讀者諸君は、既によく氣のつかれたことゝ信ずるので、こゝにこれを省略しよう。

この教訓は古來言ひたされたことであるが、それだけに我々は尚更ら傾聽すべきものと考へるのである。

（三）戰爭の規模、內容は、時代の發展と共に益々發展しつゝある。

この法則的教訓は既に第五編に於て著者が說明した所である。

殊に現代に至つて、世界の政治的及地理的環境は從前に比べて著しく狹くなつた。現に行はれつゝある世界大戰爭の如き、その規模といひ、その內容といひ、眞に世界的に發展してゐる。

然るに戰爭の本質、戰爭認識の發展を顧るとき、我々は古來今日に至る迄史上幾許の進步を遂げたかを疑はざるを得ぬ位である。しかし人類の歷史は未だ若い。そんなに焦ることもあるまいとも考へ得るであらう。然し乍ら人類はこの方面に向つて大きな反省をすることも大切な事柄であらう。

今日迄の世界戰爭史を顧るとき、人類が戰爭と平和との運營に關して拂つた熱意と、單に戰爭そのものに拂つた熱意との間に果して調和がとれてゐたらうか。世界戰爭史を大觀するとき、人類が今日迄この二つの方面の各々に如何なる努力を拂つて來たかにつき、重大なる示唆を與へてゐるやうであつて、こゝにも吾人は大きな教訓を受けるやうに考へられる。

第四章　戰爭指導の法則的教訓

こゝに戰爭指導といふのは、戰爭の準備、實行、終結に迄及ぶ意味である。

(一)戰爭指導上には、古來大別して三つの傾向がある。

これは個々の戰爭につきいふことであつて、次章に述べる様な、戰爭と平和との運營に關して一連の戰爭を對照とする譯ではない。

個々の戰爭に就ては、吾人は第二乃至第四編で、色々の角度から類型して見た。その結果吾人は、大體第二編で研究した類型、即ち速戰即決型、長期持久型、戰爭建設併行型が最も第一義的なもので、その他の類型はこれに從屬させても甚しく差支へはないことを知つた。

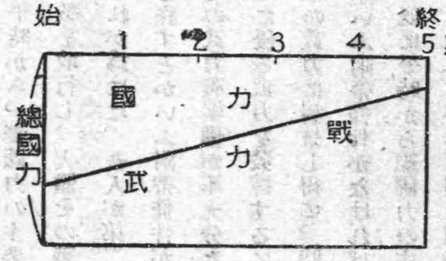
此等各型に就ての法則的敎訓は、既に第二編の各章で檢討したから、本章では此三型を綜合的に比較して、戰爭指導上の特異性を再檢討して見たい。

この三型の理解を容易にする爲、著者は單簡な圖解を試みた。

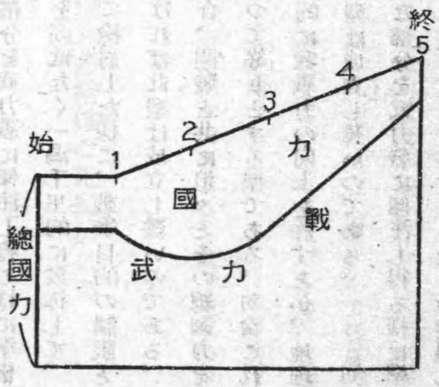
由來戰爭は、既に我々が第二章で認識した様に、國家が積極的にまれ、消極的にまれ、生存せんが爲に行はれて來た。そして戰爭の爲には國家の總力を運營してこれに當るのであるが、戰爭の特性上武力戰の運營が最も重要である。即ちこの生存の爲の戰爭に於て、總國力と武力戰との調和は最も根本的な問題であらう。

(1)　速戰卽決型

(2)　長期持久型



(3)　戰爭建設併行型



つまり戰爭指導上、總國力と武力戰との調和を圖ることは最も根本的な問題であるから、基本的な三型式は、この調和の關係によつて區別される譯であらう。

そこで圖解を說明して見る。

第一型式の速戰即決型は、既に平時から、總國力の主要な部分を武力戰に傾注し得る樣に準備し、開戰と共に疾風迅雷的に武力戰を敢行し、大體その戰力を高低なく一瀉千里的に發揮して、速に終りとする型である。勿論これが爲には、吾人が第二編で檢討した樣に、戰爭目的の制限と か、地理的、政治的環境がこれを許すとかいふ附帶條件がなければ此型は成立し難いのである。

第二型式の長期持久型は、平時の武力戰準備が不充分な場合、開戰と共に追々とその總國力を以て戰力の曲線を上げ、遂には敵に優る武力を發揮するに至つて終りとする型である。勿論これが爲には戰爭の初期、我武力は敵の武力に對抗し得て、時間的に我戰力の向上を許すとか、地理的、政治的環境がこれを許すとかいふ附帶條件がなければ此型は成立し難いのである。

第三型式の戰爭建設併行型は、既に平時から總國力の主要な部分を武力戰に傾注し得る樣に準備し、開戰と共に疾風迅雷的に武力戰を敢行する迄は速戰即決型に類するが、その後この獲得した戰果を運營して總國力を增大する所に異色がある。これが爲一時武力戰は努めて國力の消耗を避け、以て總國力の增大に協力すると共にこの總國力の上昇と共に戰力をも增大し、遂に武力戰により敵を打倒して終りとする型である。勿論これが爲には第二期以後の武力戰に於て、敵の武力戰に對抗し得て我總國力の增大を可能にするとか、地理的、政治的環境が是を許すとか、迅速な建設をなし遂げる優秀な能力があるとかの附帶條件がなければ、此型は成立し難いのである。

大體世界戰爭史を通觀すると、古來戰爭はこの三種類の型の相剋によつて行はれ、各型の附帶條件が充足されたものが勝者となつてゐることは、吾人の見て來た所である。

勿論こゝに言ふ所の總國力とか戰力とかは、精神、物質兩方面の總和であることは、古來の歷史がこれを證明してゐる。

（二）戰爭指導上には、彼我國家の政治的、地理的環境の精確な把握が必要である。

今更らこの必要を縷說する迄もない。吾人が今迄探究した法則に、殆んどこれに觸れぬものはない位であつた。問題は寧ろこの精確な把握の困難さにある。或る者は實際以下に現實を悲觀的に眺め、或る者は又實際以上に現實を思ひ上つて眺めることがあるのは、吾人が世界戰爭史に於

て見た來た許りである。

恐らくこれを救ふの道は、國の歴史、世界の歴史への深い味得と、絶えざる叡智への謙虚なる探究的努力とではあるまいか。此等の具體的なことに就ては、『現代戰爭論』、『現代用兵論』に於て、著者が詳説した所であるから、こゝにこれを省略したい。

(三)萬止むを得ない場合を慮つて、平時から戰爭を準備することは、戰爭指導上極めて重要である。

これ又今更ら縷説を要しない程妥當性のある法則的教訓であることは、吾人が世界戰爭史で見て來た許りである。

一言附加して置きたいのは、この戰爭準備といふ言葉が、一部の論者から、甚だ穩かならぬ思想として誤解される點である。戰爭と平和との關係については、第二、第三章で著者は檢討を加へて來た。しかしその際著者は、戰爭の爲の戰爭といふが如き、極端な傾向に對しても深刻な反省を促してゐる。

古人も言へる如く、治に居て亂を忘れず、とは至言であらう。世界歴史を顧るとき、戰爭否認、戰爭嫌惡の思想が、如何に多くの戰爭を激成し、如何に多くの不幸を人類に與へたかは、我々が世界戰爭史で見て來た許りである。

これに反し、思慮あり、賢明さのある戰爭準備が、如何に多くの戰爭を回避させたかを想起せねばならぬ。どんな良い利器でも、これを運用するに人を得なければ凶器ともなり得る。これは戰爭準備でも、平和準備でも等しく言ひ得ることではあるまいか。

(四)戰爭の實行からその終末にかけて、戰爭目的と戰果との愼重な較量は極めて必要である。

これは第二章(三)の法則的教訓と關聯してゐる。我々が世界戰爭史の跡を眺めるとき、この較量の態度には相反する二つの傾向があつた。

この二傾向を單的に物語つてゐるのが、普墺、普佛戰爭に於けるビスマルク公とモルトケ元帥の意見の對立であらう(第二編第二章第一節及第三編第三章第二節參照)。

あの場合ビ公は、戰爭目的の達成に重きを置き、戰果が目的を達しさへすれば、直ちに終りにしようとする。モ元帥は、勿論戰爭目的を重視するに異論はないが、しかし武力戰は常に最大の

戰果を視ひ、戰果が大となれば、自然それに應はしく戰爭目的を擴大してよいと考へる。

この對立は既に著者が私見を述べた様に、當時ビ公の勢力が大で、時として政治が統帥に容喙することを慮れ、モ元帥がこれを防止しようとして行つた煙幕的議論の觀もあるから、若干割引して考へる必要はあるが、何れにしても、理論、實際の兩方面から見て、ビ公の說に軍配を上げざるを得ぬ。

既に吾人が第二章で檢討した様に、(一)戰爭の後には次の平和があり、その平和の後には又次の戰爭がある、ことを認識し、(二)個々の戰爭は各々その要求があり、これを完全に果してゐる、と認識するならば、どうしても、戰爭の目的は確定せねばならぬ。そしてこの目的を達成するに足る戰果をあげたならば、速に終りとすることが、次の時代に移る爲の賢明な且つ謙抑な所置であらう。假りにも元帥の說を文字通りに實行すれば、戰果の大なるに從ひ戰爭目的を擴大し、從つて更らに戰果の增大が要求されることになり、彼の歷山大王や、チムールの戰爭のやうに、涯しもない戰爭に驀進する危險がある。又かゝる思想から出發すると、反對に戰果豫期の如く上らない場合には、無反省に戰爭目的を小にする危險もあり得る。結局かゝる說を極端に主張すると、戰果により常に戰爭目的が無反省で動搖することになる虞がある。事實前世界大戰のル

ーデンドルフ將軍は、この様に動搖したのである（戰爭指導の實際參照）。

が問題は單にそれだけに止まらない。元來戰爭目的なるものは、豫め彼我の力を判斷して定めたものであるから、愈よ戰爭の蓋をあけて見ると、事實豫想外のことが起り得る。この際戰爭目的と戰果との關係を愼重に較量することは、戰爭指導上極めて重要なことで、これは我々が世界戰爭史で見て來た所である。凡そ戰爭は、中々一から十まで思ふ通りには運ばぬものといふ見地からすれば、特殊な場合は別とし、多くの場合此種の較量の必要なることを歷史は教へてゐる。

さてそれなら、具體的にこれを如何に解決すべきやは、單簡な法則としては表現することは難かしい。此等に關しては、著者は『現代戰爭論』第二編第三章第三節で詳說したから、こゝでは省略しよう。

再言する。この法則的教訓は、此種の愼重な較量を拒否してはならぬといふに止まり、彼の史上往々にして見る様な、無軌道的な戰爭指導や、動搖常なき戰爭指導に對する誡といふに止まるのである。

第五章　戰爭と平和との運營に關する法則的教訓

この種の研究は主として第六編で行つた。しかしその他の各編でも著者は通常各節の終りに結局なる一項を設けて、その國家の相當の期間に亙る戰爭と平和との關係を研究して置いた。此今等を綜合して法則的教訓を求めんとするのである。

しかしこれは一番難かしい仕上作業であつて、敢てこれを法則的教訓と考へるのは、却つて當を得ぬことを怖れる。著者は單に一案を提出し、讀者諸君と共に將來更らに研究を續けたい願念であることを御諒承願ひたい。

（一）戰爭又は平和のみへの、過度に偏つた追求は、却つて國家生活を不安にする。

これは第二乃至第四章の法則的教訓を綜合すれば自然に生れるであらう。吾人は史上、ギリシヤ國、チュール帝國、獨逸帝國の如きが、戰爭への過度の追求によつて、遂に一時その生命を失つた事實を見た。又他面史上に於て、秦帝國、カルタゴ國、埃及國の如きが、平和への過度の追求によつて、その生命を失つた事實を見た。寧ろ史上この方の事實が多かつたのである。

古人は、過ぎたるは尚及ばざるが如し、といつたが誠に至言であらう。即ち戰爭と平和との調和を適正にし、運營その宜しきを得ることは、國家生活の發展上極めて緊要なる法則的教訓ではなからうか。

（二）戰爭と建設とを交互に運營するは、國家生活上極めて好都合である。

吾人は既に第二編第四章で、戰爭建設併行型戰爭を檢討し、その法則的教訓として、この型の代りに、この戰爭の第一期後若干の年月を平和に移行し、以て專念建設を行ふを得ば最も好都合な所以を述べた。これは相應妥當性のあるものと考へてよからう。一步を進めて考へれば、國家の平和生活は皆これ建設的努力なりと觀ずることに外ならぬのである。

されば、悠久な國家の歷史を冷靜に眺むる時、皆程度の差こそあれ、この法則によつてゐることが窺はれる。唯對手國が不當な嫉視により、我が正當なる發展を無視して、かゝる運營法を許さぬ場合、始めて戰爭建設併行型戰爭の必要があるものと考へられる。

然るに歷史の教ふる所によると、一戰爭に勝つた國民が、次の平和をたゆまざる建設なりと考へず、戰勝に心驕り、奢侈放慢に流れ、遂に堅實な建設を忘れたり、或は又反對に自己周圍の環

境に深く注意せずに、力に應はしくない戰爭に突進すること等が相當多く行はれてゐた。

結局この教訓は、右述べた様な史上の事實に對する誡めとも見るべき教訓であらう。

第六章　結　論

以上我々は本編だけでも十四個の法則的教訓を探究し得た。その他細部の法則的教訓に至つては第二乃至第六編に亙り實に三十九個の法則的教訓を究めたのである。

この様に我々は大雜把ではあるが、隨分各方面から辛棒づよく探究の歩を進めた。恰も長江の流れを究めるに當り、その上流たる崑崙の寒氣にもめげず、その中流たる三峽の嶮にも膽を冷さず、又下流たる緩々の舟航にも倦まずといふ譯で、努めて冷靜に、謙抑に、科學的檢討を加へたのである。いでやこれから最後の感懷を誌つて終りとしよう。

一　民族精神の重要性

何事によらず、精神と物質とは相倚り相扶けて始めて完璧である。戰爭も平和も亦此埒外に置かれる譯には行かぬ。

殊に戰爭は國家の將來を左右する緊張した現象であるから、猶更ら然りである。我々は此戰爭史を通じ、戰爭の最後の決をつけるものは、主として精神力であることを知つた。殊に現代の様

に、民族精神が昂揚せられ、しかも一般的に見て、その文化の方角が、物質偏重に過ぎるやの傾向が大きい時代に於ては、益々然りと考へざるを得ぬのである。

よく考へて見ればこれは當然のことであつて、人類が他の生物と異るのは、その叙智の備はつてゐる所にある。精神といひ物質といひ、その根源は皆人間の叙智を通じて觀じ得るものであるが、叙智そのものが既に精神的なものであることを想起せねばなるまい。

吾人が五千年の戰爭史を顧みて、肯ける第一の感懐は、最後にものを言ふものは精神であり、戰爭の勝敗を決する最後のものは、民族精神に外ならぬといふ事實であらう。

二　現實把握の重要性

人類の世界は無限に發展しよう。國家の生命も悠久である。人間の叙智も限りなく發達しよう。されば現在が發達の頂點に達したと觀じ、或は自分が發達の極點に到達しありと觀ずることは、小々思ひ上りではあるまいか。必ずや次の時代があり、次の發展があると考へるのが謙抑の道ではあるまいか。

かくして始めて、歷山大王が涯しもない戰爭に突入したり、始皇が不老不死の靈藥を求めたりした轍を踏むことが避けられるのではないだらうか。

それに至るの道は多々あらうが、我々は嚴肅な事實を正しく認識し、あるが儘の現實を率直に把握するの用意も亦極めて重要であらう。戰爭に敗れたものが、多くこの現實把握の不足から出發してゐることは、我々が戰爭史に於て數多く見た所である。

淸く、高い精神的理想の堅持と共に、現實の姿を率直に把握して、これに善處し、理想に向つて倦まず、焦らず、撓まず、堅實なる歩みを續ける心掛を以て戰爭に處することが、國家の、延ては世界の、悠久なる發展に寄與する道ではあるまいか。

三　腹八分の道理

健康で長壽される人々の經驗に聽くと、多く腹八分と答へられる。又榮養學の方面に聽いても、暴飲暴食を誡め、多くの人々が必要以上の榮養をとり、それが爲却つて健康を害してゐる事實を擧げる。

これは一體どうしたことだらう。惟うにこれは、人間の慾望から生れる主觀と、これを離れた客觀との差から來るのではないだらうか。即ち客觀では今の所これで充分と敎へるが、主觀では

否まだ〳〵不充分であると考へることは屢々あり得る。

人間が榮養を攝取することは、生きんが爲に絶對に必要なことである。しかしそれにも程度がある。必要以上の榮養を攝取すれば、却つてそれが生命を短縮させる。

國家が生活して行く爲に、戰爭が起ることは避けられぬ。これは著者がこの戰爭類型史論に於て、誤解の起らぬ樣に力說した所である。しかしそれにも程度がある。必要以上の戰爭が、却つて國家の生命を傷けることは、史上我々が見て來た許りである。それは個人に於ける、主觀上の腹八分の反省と同樣なものだといふ示唆ではあるまいか。

況んや國家は、一般の生物以上に靈妙なものと考へられる。人間の生命には、いくら健康に注意しても限りがあるが、國家はそれ自體の働きによつて悠久の生命を保持する。それ自身の働きとは抑も何んであらうか。恐らく我々が檢討した戰爭史から受ける暗示は、理想と現實との程よい調和ではなからうか。そして、これに達するの道は、主觀的に考へて、腹八分の攝生法を守るにあるやに考へられる。

史上に於ける國家の盛衰と戰爭との關係を檢討して、此種の感懷を禁じ難い樣である。

四　皇國戰爭史の特異性

この研究は、世界戰爭史の流れに棹さして、科學的に戰爭を研究したもので、特に皇國戰爭史の特異性には深く觸れる暇はなかつた。蓋しこれが爲には、皇國肇國以來の歷史を究め、その戰爭を檢討する作業が必要である。

著者は既に他の機會に於て述懷した樣に、哲學、理論、史論の三方面から綜合した、日本戰爭論を畢生の仕事として研鑽してゐるが、未だ發表の時機に至らない。現に本書の中でも第六編に於て、皇國歷史中の一期間に對し、戰爭と平和との關係を觀察したいものと考へ、著者の禿筆は幾度もこれに向けられたが、さて自己の研究不充分さを顧るとき、著者の如き不敏なものが、敢てかゝる重要な仕事に輕々しく乘り出すのは時機尙早であると考へて、遂にこれを中止したのである。

惟うに皇國の戰爭は、その根源を我肇國の御精神に發するものと拜察される。この大精神は、これを古今に通じて謬らず、これを中外に施して悖らざる大道で、これは世界を光被する聖なる御精神と謹解される。

されば皇國の戰爭は、皆その根源をこゝに發し、會々誤れるもの、迷へるものがあるとき、これに對し是正の劍、破邪の劍を拔かせ給ふものであらう。彼等がその過ちを正し、その迷ひを醒ませば、この聖なる劍は直ちに鞘におさめ給ふものであらう。これが皇國戰爭史の根本的な御精神と謹解される。

かくして我等の祖先は　天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、光輝ある二千六百餘年の歷史を我等に傳へた。我等も亦祖先の志を繼承し、これを我等の子孫に受け繼がしめ、皇國臣民としてのつとめにいそしましめるのである。

この御精神と共に、皇國戰爭史を顧みて痛感することは、我國の地理的、政治的環境が戰爭に重大な影響を與へてゐることである。この理想と現實との調和によつて、皇國の戰爭は戰はれた、又戰はれつゝあると著者は謹解するのである。

我等は今や大東亞戰爭に必死の努力を傾注してゐる。宣戰の　大詔を奉戴して、擧國一致一日も早く戰捷を獲得し、以て宸襟を安んじ奉ることに渾身の努力を致さねばならぬ秋である。

このさゝやかな研究が、幾分でもそれに寄與し得るならば、著者の願念は達せられる譯である。願はくは讀者諸君と共に、相携へて一意この聖業に向ひ邁進しようではないか。

昭和十八年九月十八日初版印刷
昭和十八年九月二十一日初版發行（五〇〇〇部）

戰爭類型史論
㊕定價四圓五十錢
特別行爲稅相當額　十五錢
合計四圓六十五錢

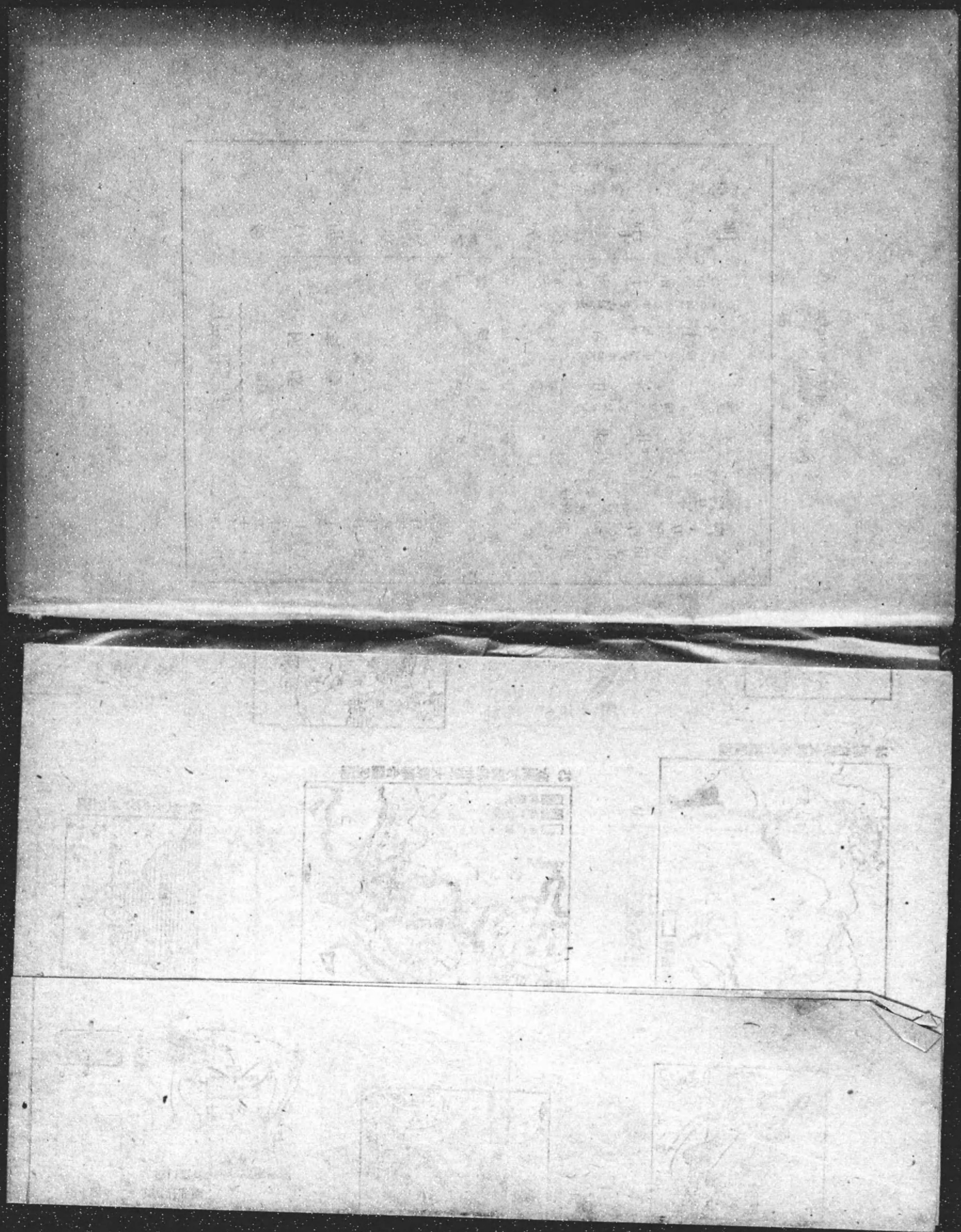
著者　酒井鎬次（さかゐかうじ）
東京都芝區新橋七ノ一二
發行者　山本三生
東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　大日本印刷株式會社
東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷者（東東一）長谷川定一

（出文協承認 あ 480479）

版權所有

發行所　東京都芝區新橋七ノ十二
改造社
振替東京八四〇二番
電話（芝）一二二一—一二二四番
會員番號一〇六〇六七番

配給元
日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九



1 普國戰爭概況圖

2 サドワ會戰圖

3 米西戰爭玖馬方面圖

4 米西戰爭 ヒリッピン方面圖

5 日清戰爭概況圖

6 黃海海戰圖

7 第一、第二回波斯戰役圖

8 第二回波斯戰役圖

9 第一ポエニー戰爭概況圖

10 百年戰爭英、佛關係圖

11 百年戰爭第一期戰況圖

16 清朝創立戰爭圖

17 十七世紀末北歐形勢圖

18 彼得大帝戰爭圖

19 秦對六國關係圖

24 前世界大戰聯合關係圖

25 歐洲方面前世界大戰聯合關係圖

26 文永之役概況圖

30 露土戰爭一般圖

31 露土戰爭戰況圖

32 第二ポエニー戰爭一般圖

12 百年戰爭第二期戰況圖

戰役圖

西戰爭
ヒリッピン方面圖

27 弘安之役概況圖

28 函谷關圖

21 七年戰爭一般圖

13 歷山王第一第二期戰爭圖

14 歷山王第三第四期戰爭圖

15 歷山王第五期戰爭圖

28 普佛戰爭前半戰況圖

22 ロイテン戰況圖

23 七年戰爭戰況圖

29 普佛戰爭後半戰況圖

一般圖

33 カンネ戰況圖

第一回カンネ會戰配備圖
第二回カンネ會戰衝突圖

34 第二ポエニー戰爭戰況圖

35 クリミヤ戰爭一般圖

24 前世界大戰聯合關係圖

16 清朝創立戰爭圖

9 第一ポエニー戰爭概況圖

30 露土戰爭一般圖

31 露土戰爭戰況圖

25 歐洲方面前世界大戰聯合關係圖

17 十七世紀末北歐形勢圖

10 百年戰爭英、佛關係圖

18 彼得大帝戰爭圖

11 百年戰爭第一期戰況圖

32 第二ポエニー戰爭一般圖

26 文永之役概況圖

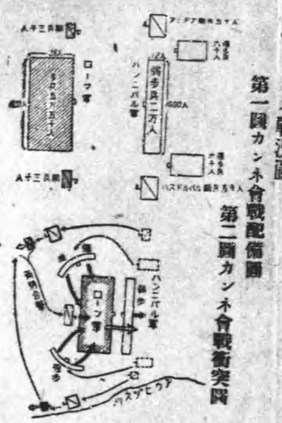
19 秦對六國關係圖

ポエニー戦争一般圖

永之役概況圖

19 秦對六國關係圖

波斯戰役圖



33 カンネ戰況圖

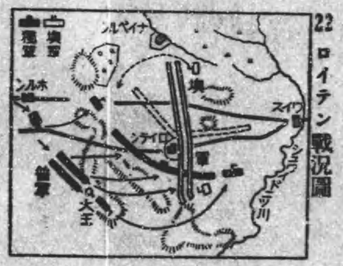
27 弘安之役概況圖

20 函谷關圖

12 百年戰爭第三期戰況圖

21 七年戰爭一般圖

13 歷山王第一第二期戰爭圖



22 ロイテン戰況圖

14 歷山王第三、第四期戰爭圖

23 七年戰爭戰況圖

15 歷山王第五期戰爭圖

35 クリミヤ戰爭一般圖

34 第二ポエニー戰爭戰況圖

28 普佛戰爭前半戰況圖

29 普佛戰爭後半戰況圖

36 セバストポール攻囲圖

40 カルタゴ滅亡圖

37 日露戰爭一般圖

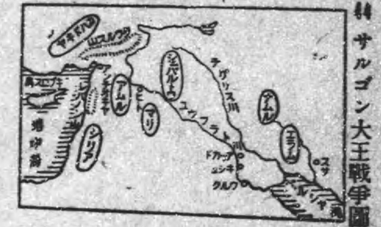
41 チムール戰爭一般圖

42 チムール帝國領域圖

38 日本海海戰圖

43 獨波戰爭戰況圖

39 第二ボエニー戰爭ローマ軍進攻一般圖



51 秦帝國北境圖

44 サルゴン大王戰爭圖

52 アツシカ帝國領域圖

45 パリス大戰圖

53 ローマ大帝國領域圖

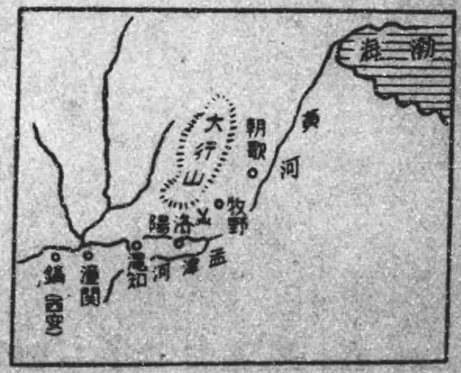
60 蒙古軍南露討伐圖

59 成吉思汗ホラズム國討伐圖

65 ムガール帝國領域圖

61 太宗金討滅圖

55 アッチラ王東ローマ討伐圖



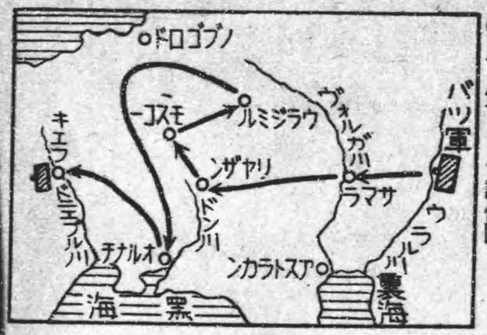
46 牧野大戰圖

54 第五世紀歐洲圖

67 グラブリーヌ海戰圖

東ローマ討伐圖

39 第二ポエニー戰爭ローマ軍進攻一般圖



62 バツ軍ロシヤ討伐圖

56 カタロヌ戰役圖

47 キロス、カンビセス兩王戰爭圖

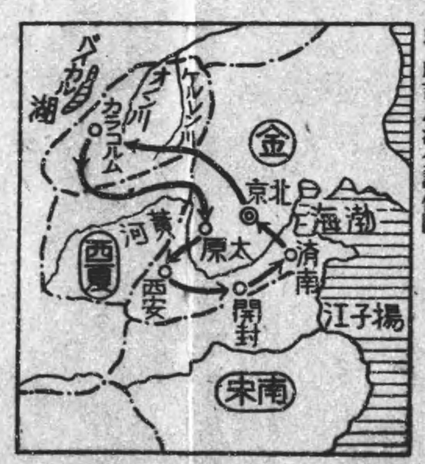
57 十字軍戰役圖

48 波斯大帝國圖

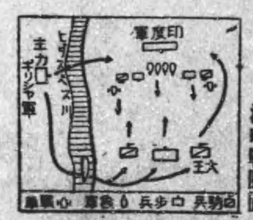
49 歷山王東征圖

63 バツ軍波蘭匈牙利討伐圖

64 回教帝國領域圖



58 成吉思汗金討伐圖

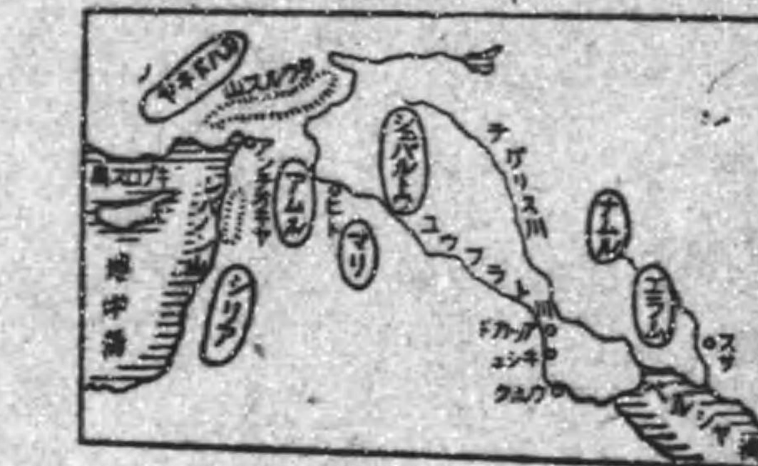


50 ヒダスペス河畔戰鬪圖

40 カルタゴ滅亡圖

42 チムール帝國領域圖

43 獨波戰爭戰況圖



44 サルゴン大王戰爭圖

45 アバリス大戰圖

46 牧野大戰圖

51 秦帝國北境圖

52 アソカ帝國領域圖

53 ローマ大帝國領域圖

54 第五世紀歐洲圖

55 アッチラ王東ローマ討伐圖

59 成吉思汗ホラズム國討伐圖

60 蒙古軍南露討伐圖

61 太宗金討滅圖

65 ムガール帝國領域圖

66 英、西海戰一般圖

67 グラブリーヌ海戰圖

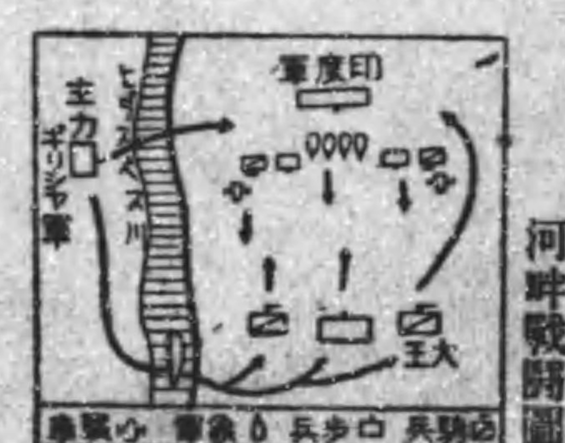
68 奈翁戰爭一般圖

翁戰爭一般圖

47 キロス、カンビセス兩王戰爭圖

48 波斯大帝國圖

49 歷山王東征圖



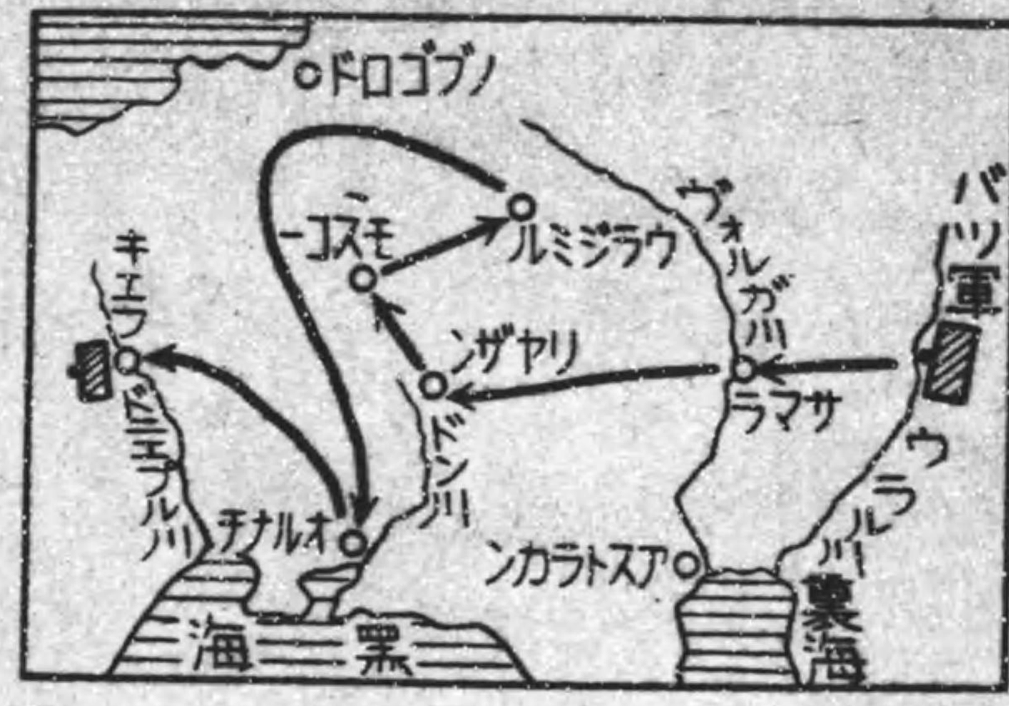
50 ヒダスペス河畔戰鬪圖

東ローマ討伐圖

56 カタロヌ戰役圖

57 十字軍戰役圖

58 成吉思汗金討伐圖



62 バッ軍ロシヤ討伐圖

63 バッ軍波蘭匈牙利討伐圖

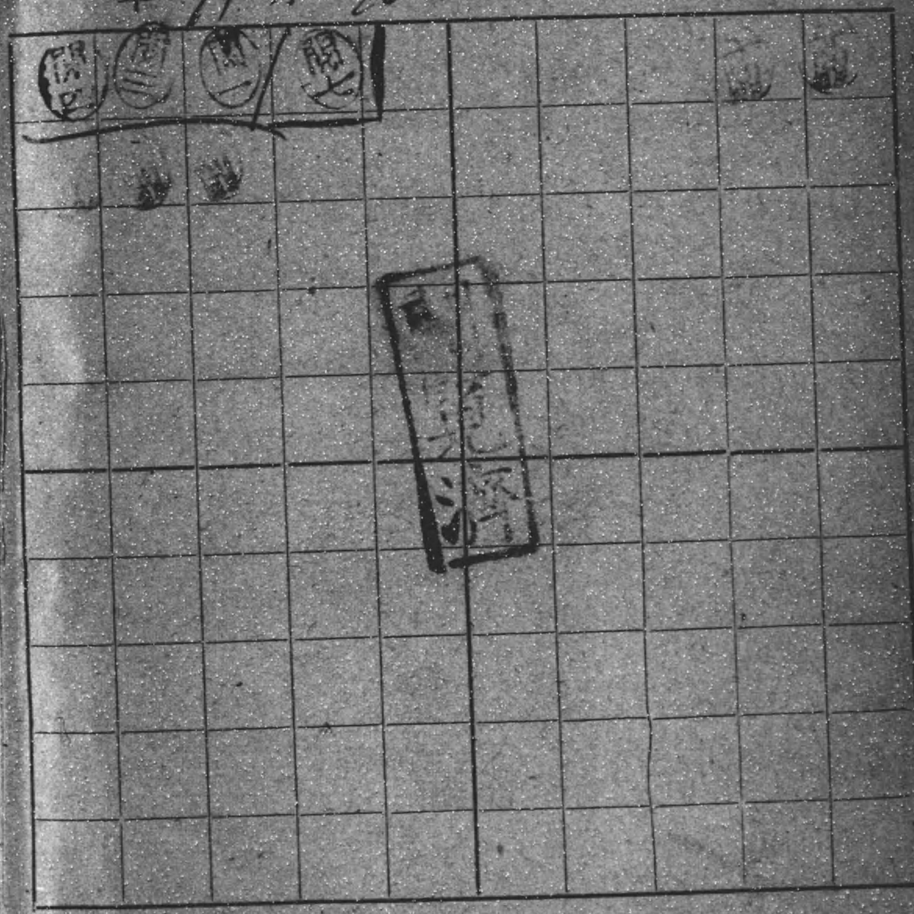
64 回教帝國領域圖

69 一九一七年末戰線圖

70 ギリシヤ大帝國分裂圖

71 秦大帝國領域圖

72 ドイツ大帝國圖

964
135

年 11 月 20 日